

## 児童文学研究—その(3)—

### 児童向け物語の分類に関する私見

高 山 浩 子

#### はじめに

児童文学のうちで、もっとも親しみ易いのは子供向けの話である。この児童向けの話は、内容によっていろいろなものに分類されるであろう。通常「物語」というのは、広義には「作者の見聞、または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品」(広辞苑)であり、児童文学の主流をなすものは、このような作者の想像力によって描出される物語である。そこで本稿では、児童文学の分野で児童詩と双璧をなす児童向けの物語について、どのように分類できるかを考えたい。

まず、児童向けの物語文学は、一般的に童話といわれる。童話は、本来、幼児から小学校の児童間での年齢層に理解できるように配慮された物語であるといえよう。もっとも最近では、大人向けの童話も出現しているが、これは大人にも子供の気持ちに帰ってファンタジーの世界に散策する余裕を与え、それにより、ストレスの多い現代の大人に、一種の癒し効果をもたらすことを期待したものであろう。しかし童話とは、やはり本来は年少の子供に理解されるものでなければならない。

最近では、大人と子供の間層とも言うべき年齢層に向けた小説が見られる。この問題に関し、ピーター・ハントは『児童文学入門』(*An Introduction to Children's Literature*)の中でこう述べている。

Other books suffer from the problem of generic expectation: ... others look like adult books but are actually for a developing audience. 'Teenage fiction' (which forms this latter category) is a comparatively recent phenomenon. In 1971 Frank Eyre was still pondering on the difficulties of this genre:<sup>1)</sup>

ハントがここで述べているように、児童文学にもやや新しいジャンルが生まれているようであるが、本稿では従来通りのものについて考えたい。

一般に年齢層の高い子供には、複雑な内容の物語が好まれる。ここでは、通常、少年少女が主人公となって活躍するものが多い。このような物語は、童話というよりは、むしろ児童・生徒向けの小説である。小説の範囲はたいへん広く、推理小説、恋愛小説、冒険小説など、実にさまざまなスタイルの小説がある。そのどの分野でも、子供にわかりやすい様式で書かれていて、子供を読者対象にしていれば、やはり児童文学というべきであろう。

このような児童を対象とした物語文学の性質と内容から、これを以下のように分類することにした。

1. 環境密着型——このカテゴリーには日常的な話題を提供するような物語が含まれる。これに

は、読者の日常的な環境で生起するさまざまな出来事が含まれる。児童文学では、主人公は必ずしも子供でなくともよいが、子供が読むことを前提とする。近頃は『ピーター・ラビット』や『ハリー・ポッター』のような、大人も読んで楽しむ本もあるが、やはり児童文学の対象は児童である。現実社会において日常の経験や伝聞を中心とする子供向けの物語は、すべてこの範疇に入る。そこには親子や兄弟の間に愛情の話も含まれるし、友情の話も含まれる。

2. 空想型——この種類のものは、現実にはない現象や事象の中で展開される子供向けの物語をすべて含む。この種類のものでは、実際には起りそうもない出来事の中で、叙情的な物語が展開されていく。それには、夢の中の出来事や自然界の擬人的な描写なども当然含まれる。

3. 反復型——反復型とは、時間軸の上で自由な時点において展開される物語をいう。それは過去において語られた話であるかも知れない。したがって、いわゆる民話なども、このカテゴリーに入ると考えられる。また過去のある時点で書かれた話の、リトルドつまり改作あるいは改訂版も含まれることになる。また、過去のある人物の伝記なども、反復型の物語と考えてよいであろう。

4. 冒険型——冒険型とは、児童の好奇心を誘うものであり、読者としての児童がこの種の冒険物語を読むことにより、主人公に自分を代行させるカタルシス的な効果も期待できる。このカテゴリーには、過去型の物語と未来志向型の物語が考えられる。

以上の四つが主な類型であろう。そのほかに、児童文学の論議で絶えず問題になる道徳や倫理の問題、教訓の問題などは、これら四つの類型のどれにも関与せざるを得ない。また、それぞれの物語の主人公が少年・少女である場合に、児童はこれらの文学を読むことによって、主人公たちが経験や体験を重ねて成長していく過程を理解し、それを追体験するということが、児童文学の大きな役割であるということも認識すべきことであろう。これらのものは、児童文学の全領域に関与するべきものであろう。

児童文学に関しては欧米が先行しているが、英語圏児童文学の中ではイギリスに一日の長がある。それはやはり古い歴史の重みであろう。その辺のことをハントは『児童文学史』(*Children's Literature — An Illustrated History*)で、このように記している。

The number of titles of children's books went on rising, to the point that in 1991 the number of children's titles published in the United Kingdom (6,154) exceeded by more than 1,000 the number published in the USA (5,111), yet the USA had five times the population.<sup>2)</sup>

したがって本稿でも、海外の児童文学に関しては、主としてイギリスの例を引用することにする。それでは次に、これら四つの類型について、具体的にはどのような内容のものか、そして児童に対してどのような効果を与えるものか検証してみよう。

まず第一に、環境密着型について考察したい

## 1 環境密着型

子供にもっともわかりやすい児童文学は、子供が日常見聞する周囲の世界を題材とするものであろう。児童にとって、毎日の生活空間が世界である。したがって、日常体験する事象は理解しやすいので、その日常の空間で生起するものを扱ったお話は、幼児にとってもわかりやすいのである。

現実には子供の活動する世界は、空間的に限られている。幼児の場合は、家庭がほとんどの時間を過ごす空間であり、現在では幼稚園や保育園などがそのような空間として挙げられる。したがって、家庭内あるいは園内で経験することが、幼児の経験のほぼすべてである。そのような日常的な空間

で生起するさまざまなことが、対象となる子供の感性に響くような効果をもたらす話が、この種の童話の主題となる。

この種の物語では、日常的な話題の中で、読者としての児童に感銘を与えることが目的になる。その感銘により、児童は精神的に刺激されてある種の情動が喚起され、展開される物語の内容に強い印象を持つに至ることが望まれる。こうした刺激と感情の高まりは、児童を高次の精神状態へと引き上げる効果を期待できる。ここにおける感銘とは、強い喜びの感情であったり、深い悲しみと同情であったりする。

一般にこの種の物語には、忘れていた感情を呼び戻す作用がある。そういう感情は、児童が普段持っているが、日常の習慣性に埋没しているか、習慣に麻痺しているものであって、物語の内容に触れることによって、新たに強い情緒的感動を受け、児童の内にそういう感情が起こるのを再発見させる効果がある。

普段は何でもない日常的な生活を話題としながらも、何か新鮮な感情を体験したときに、改めて児童は自分の置かれている境遇について、幸福感や満足感を覚えたり、あるいは作中の人物、とくにそれが自分と年齢の近い子供の場合に、共感や同情や賞賛の感情を喚起させられる。つまり、児童の通常的环境における通常の出来事の物語のうちにも、読んでいる児童、あるいは母親が読むのを聞いている児童には、深い感銘を与える物語が数多く存在するのである。

想像力で童話を書くのが得意の一部の作家を除いて、一般には、日常経験した出来事や体験した感情などを表現することの方が容易であるかも知れない。その意味では、日常的话题を主題とするものは、当然多くあってもおかしくない。母と子の毎日の生活で強く印象づけられた出来事は、もっとも話題としての普遍性がある。さらに兄弟や友人との愛情や喧嘩や誤解や和解の経験は、童話の上に生かされることが多いであろう。また、子供と動物との愛情の話なども、その一例であろう。最近の創作童話の多くが、このような日常性からヒントを得て書かれているように思われる。

日常的な話題をテーマとする童話は、子供たちが生活している現実の世界で展開されるので、その話の中に入って行きやすく、したがって読者としての児童が、理解しやすいという長所がある。こういう生活上のエピソード風の童話は、精神的に成長過程にある児童にとって、教育的な効果があり、知性や感性の発達に役立つもので、ちょうど大人の場合の教養小説的な効果が期待される。

児童は多くの現実的生活体験を重ねているのであるから、その同じ土壌での話には親しみが湧き、追体験が容易である。したがってそこに感情移入効果が介在するので、そこに教育効果が期待されるのである。作品の鑑賞においては、年齢が若いほど作品に没入して、自己を作中人物と並べてしまうか、同一視してしまう傾向が強い。すなわち、さめた気持ちで作中人物を眺められず、作中人物になりきってしまうことも多くある。そう考えてみると、本来、作家が日常的に経験したり体験したりしたことを書くことの方が、話の筋を考えてから書いていくよりは簡単のように思われる。

#### a 生活経験タイプ

一般には生活している世界のことを表現するのは、想像上のことを物語の筋として構成して、展開していくよりも簡単と思われるけれど、想像力豊かな一部の作家では、日常性な話題をテーマとする方がずっと少ないこともある。たとえば、宮澤賢治がその種の作家である。彼の数多い童話のうち、「十月の末」は、この作家では珍しく日常的なことが話題となっている。主人公の嘉ッコは東北の田園地方に住むと思われる小さな女の子である。この話には田園の叙情的な情景を背景に、嘉ッコの父母と祖父母と兄との会話を中心であり、それに隣の善コという友達とその母親や、それに西洋人なども登場する。

同じく賢治の「谷」という短編は主人公の「私」が回想する形で書かれていて、小学3～4年生のころ、友人の理助の案内で深い谷のそばを歩いてキノコを採ったこと、そして翌年は理助が北海

道に越したので、別の友人の慶次郎と山歩きをして採りに行って新しい採集場所を見つけたと思ったら前と同じ所だったという話であるが、これもまた、東北の山林での日常的な話題のひとつである。おそらく賢治はこのような経験をしたか伝聞を得たのであろう。

## b 愛情タイプ

親子の愛情も兄弟愛もこの環境密着型の児童文学の一分野であり、これをテーマとした多くの童話が作られている。日常性という点から言えば、家庭内の話題を扱ったものが中心であろうが、話題性や珍奇性などという点では、やはり舞台を広く設定した方が面白いといえる。その点で、『母を尋ねて三千里』などは、母と子の愛情を強く前に出した物語といえよう。

また、バーネットの『小公子』やマローの『家なき子』なども、この種の物語の一部と考えられよう。前者はニューヨークで育ったセドリックという少年がイギリスの祖父の元へ迎えられて、母親と祖父の間で苦労する話で、後者は捨て子のレミーが母親に会うまでの過程を描いたものであり、両者ともに母子の再会が重要なモチーフとなっている。しかしながらそのねらいは、子供の精神的な成長をテーマとしたものであろう。つまり両者ともいわゆる子供向けの教養小説的な要素を多分に含んでいると言える。その一部として母子の問題が存在しているのである。

兄弟愛をテーマとしたものには、エーリッヒ・ケストナーの『双子のロッテ』がある。双子の姉妹が助け合う話である。

友情をテーマとしたものがある。たとえば、ヨハンナ・スピリの『アルプスの少女』などは、主人公ハイジと雇い主の令嬢クララ、あるいは友人のペーターとの友情が中心となっているとも考えられる。この物語は、山と都会を背景に、子供たちの友情と周囲の大人たちの生活を描いたものであろう。太宰治の『走れメロス』も、子供向けに書き直されて読まれることがある。これなどは明らかに友情をテーマとしたものであろう。

次に、動物への愛情をテーマとしたものがある。ウィーダの『フランダースの犬』は、そうした作品の好例であろう。これはフランダース産のパトラッシュという犬と、老人と孫との愛情を描いたものである。

## 2 空想型

現実にはないものをテーマとすることは、童話においてはたいへんしばしば行なわれる。それは、児童は想像力に富み、現実とはかけ離れた世界への没入が比較的容易だからである。一般に大人は目前に展開する現実の人間関係や経済的状況など、さまざまな現象に対応を余儀なくされ、想像の世界に遊ぶ精神的な余裕がない者がほとんどである。したがって、想像上の話など、聞いても読んでも利益もないので、現実主義者の大人には、その世界に浸る心の余裕がないのである。

一方、児童の多くは、とくに日本では、経済的な問題とは無縁な者が多く、したがってそういう児童は現実と対峙することは少ない。また子供は大人のようにには時間に拘束されない。このように制約されることが比較的少ない子供は、興味をそそる読み物に触れると、自由に想像の世界で闊歩できるので、幻想的な話や想像上の世界に容易に立ち入ることができる。

このような理由から、児童向けの読み物として幻想的な物語や想像上の話が多くなる。とりわけ超自然の出来事や動物や植物の擬人化された世界の話などにも、多くの児童は感心を寄せるのである。従来の童話の多くの部分をこのような空想的な話が占めてきたし、現在でもその割合は多い。

このような空想型の物語を分類すると、a おとぎ話タイプ b 想像的物語タイプ c 夢物語タイプ d 擬人的物語タイプ などに分けることができる。

#### a おとぎ話タイプ

おとぎ話は、昔からたいへん多くのものが語り伝えられている。おとぎ話には文学性が少ないとして、児童文学の一部とみなしたがらない人たちもいるようであるが、児童が喜んで読んだり見たりすることを考えれば、それなりに児童の心に何らかの印象あるいは感銘を与えるものであるといえる。したがって立派な児童文学であろう。

昔から伝えられているおとぎ話には、「舌切り雀」、「花咲じじい」、「桃太郎」、「金太郎」、「一寸法師」、「浦島太郎」など、誰でもが子供のときに聞いたり読んだりしたものがたくさんある。広辞苑によれば、おとぎ話とは「①人のつれづれを慰めるために語り合う話、②子供に聞かせる昔話や童話、③非現実的な話」とあるが、ここでは②の記述に近い定義を採用する。つまりおとぎ話とは、大人が子供に聞かせる昔話であると考えよう。そこにはその民族の伝統的な道德観が盛られており、それには幼児や児童のしつけに役立つものも多く含まれる。面白おかしく語り聞かせることで、子供に無意識に固有の倫理観を植え付ける効果がある。

おとぎ話は民話が発展して標準化され、固定した物語になったものと考えられる。この意味で民話との境界が曖昧になりがちだが、おとぎ話は地域性をほとんど失っており、民話は地域性が濃いものである点が、この両者を分けるように思われる。

この種のおとぎ話は現代でも多く語り継がれており、とくにきれいな絵を伴った絵本として多く読まれていて、いまなおその存在価値を失わない。それはやはり、それだけの効用があるからであろう。

#### b 想像的物語タイプ

児童文学でもっとも多いのは、この種のタイプであろう。それは児童が想像力豊かであるという本質に基づいている。児童は現実世界から飛躍して想像の世界に入り込むことが極めて容易である。一般に読書の効用が人間に喜びを与えるものであれば、読んで楽しいと思うものなら、現実であろうと想像であろうと世界の質を問わない。その意味で、想像の世界で生起する物語は、やはり読み継がれるものなのであろう。

想像的物語は、時間と空間を自由に舞台にできるので、時空間の制約は全然ない。そこでは、日常の世界ではまったく考えられないことであるが、さまざまなものが生命を持ち、豊かな感情を持つ。また魔法や妖術が真実味を帯び、奇想天外なストーリーが展開されていく。

この種の物語には世界的に有名なものが多いが、よく知られているところでは、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』がある。不思議の国の物語は、アリスがウサギの穴に落ちたところから始まる。そこではウサギが人間のように口を利き、トランプでさえも話をするし、卵のお化けのようなハンプティ・ダンプティも出てくる愉快な話である。この話は、まったく日常性とはかけ離れた世界での出来事を扱っているものである。アリスの物語が現代でも廃れることなく子供たちに読み継がれているのは、やはり時間と空間と常識を超越したこの物語の面白さであろう。

魔法を操る『ハリー・ポッター』の話は、いまや世界中に知られているが、この物語も現実からは遊離したまったく幻想的なものである。

欧米ばかりでなく日本でも、この種の物語はよく受容される。たとえば宮澤賢治の童話の多くが、こうした非日常的なものである。『銀河鉄道の夜』、『双子の星』、『注文の多い料理店』など今日でも親しまれている童話は、こうした日常世界とは違う別の世界の話であり、それらが賢治童話として命脈を保っている。

古くは、平安初期にできたと伝えられる『竹取物語』も、その空想性からいうと、やはりこのタイプに属するものであろう。かぐや姫と月という連想は、いまや日本人の多くの心に宿っている。

このような非日常的あるいは超自然的な物語は、子供にはすんなりと受け入れられるが、それは

子供たちがナイーブで実世界の制約や拘束に縛られず、自由な発想をし受容性に富むからである。面白いことにこうした物語は、大人の一部にも受け入れられているが、それはまったく別な理由からである。つまりこの種の物語に浸る大人は、現実の厳しさを十分に認識するあまり、現実逃避や憩いの場を求めためであり、思考環境を変えてストレスを発散させるためでもあろう。

#### c 夢物語タイプ

実世界で生活する人間が、時間と空間を変えるもっとも簡単な方法は、夢の中である。童話のうちには、夢を利用したものも多くある。夢の中ではどこへでも自由に行けて、どの時代でも活躍できるし、日頃見慣れたものが簡単に形を変えて別のものになってしまう。夢とはそうした不思議なものである。したがって夢の中で語られる話は、道理や秩序がなくても誰も不思議に思わない。それゆえに童話の世界の非日常性が矛盾なく現出できる。

夢をテーマとした作品も多いが、夢を媒体とする物語もたくさんある。

メーテル・リンクの『青い鳥』は、その一例であるが、この話では、幸せの象徴である「青い鳥」を求めていた主人公チルチルとミチルは、夢から覚めてそれが日常的な生活の中にあることを悟るのである。この物語は、普段の生活を大切にすることの重要性を、教訓として含んでいるが、それが夢という媒体を通して理解されるのである。

この『青い鳥』では、舞台は普通の家庭である。二人の子供のまったく日常的な環境から、この物語が展開する。そこには妖精や魔法などの存在しない、ごくありふれた家が舞台となっている。ただ、夢という千変万化の世界は存在するけれど、はっきりと現実からは遊離した世界として描かれている。したがって、夢から覚めたときのチルチルは、現実世界にいて夢の中での出来事を回想してこの現実の世界で明白に納得する構成である。

同じような話は、チャールズ・ディケンズの『クリスマスキャロル』にもある。この物語では、主人公の守銭奴スクルージは、夢の中で過去・現在・未来の幽霊に悩まされ、夢から覚めて改心し、情け深い人間になる。この物語は欧米ではクリスマス前後に、盛んにテレビで放映され、現在でもその存在価値を失ってはいない。これは必ずしも児童文学の範疇に含まれるとは限らないが、しばしば子供向けに編集される話である。

#### d 擬人的タイプ

日常世界では動植物は人間の言葉を話さないし、自然界の事物などは思考しないしと考えられている。しかしながら童話の世界では、動植物も言葉を話すし、風も石も川も意志を持って思考する。このように、普段は自然界では人間に語りかけられないものが、生命と明白な意志を持って、彼等同士あるいは人間に語りかける物語がたくさんある。つまり、これらのものをあたかも人間と同じ意識を持つものとして扱っているのである。このように、自然界のすべてのものを擬人化して登場させる童話も数多く存在する。

有名なところでは、ベアトリックス・ポッターの『ピーター・ラビット』もそのひとつである。ポッターはウサギを主人公として物語を展開する。ウサギに人間と同じ品性と能力を与えて、動物と人間の話を、自らの挿絵を添えて展開する。

子供が喜ぶ同じような動物の話は、実にたくさんある。動物になりきってその行動を考えることは、人間よりも知能が低いという根拠から可愛らしいという感情が湧いてきて、この種の物語はいつの世も廃れることがない。『小熊のプーさん』や『パディントン・ベアー』などの物語は、国境を越えて世界中の子供たちに親しまれている。

日本でもこの種の話には事欠かないが、引用ついでに賢治の作品を挙げれば、『よだかの星』では、ヨダカが擬人化されており、『ドングリと山猫』や『ゼロ弾きのゴーシュ』では、訪れてくる

のは話のできる動物たちである。

動物を擬人化して人間と同等に会話できるものであれば、民話の『聞き耳長者』のようにさぞ楽しいであろう。こうした子供の思いが、擬人化という手法で繰り広げられるのである。

### 3 反復型

童話の中には、創作というよりも伝承に近いものがある。また個人的な事実の伝聞や記録などがある。さらには、すでに存在している小説や物語が、児童の年齢に合わせて書き直されたものがある。こうしたものは、一括して「反復型」という類型にまとめることができる。

したがってこのように考えてくると、この種の反復型の童話として、a 民話タイプ、b 伝記物語タイプ、c 改作物語タイプの三種類が考えられる。

#### a 民話タイプ

反復型の中でもっとも一般的なのは、いわゆる民話である。民話はその字義通り、民衆の中から伝承されてきた説話である。もちろん本来は一般の民衆向けのはずであるが、子供も理解できるものもたくさんある。親が子に、子が孫に語り継いできたのであるから、当然子供が理解できるように語りになっている。しかも特定の地域に生じた民話はその地方の方言で語られる。

民話の中には広く伝えられ、世に知られて発展し、伝承的なものとなったものも多い。たとえば「桃太郎」も、もともとは民話であり、しかもその発祥の地が若干異なったものがあったが、いつの間にか何処かのものに標準化の過程が進んで、現在の形になったものと思われる。実際に桃太郎伝説は、瀬戸内のあちこちに存在し、四国側と岡山ではやや内容が違っているし、鬼ヶ島なる島は瀬戸内海の島のひとつが仮定されたのであろう。「一寸法師」も同じような傾向を持つ昔話である。このようなおとぎ話にまで発展せず標準化がなされなかった民話は、各地に実に多く残っている。このような種類の民話も、子供が対象である所から、やはり児童文学の一隅に加えても良いように思われる。

#### b 伝記物語

童話の中でも、伝記物語はほかの童話と違って、ある程度事実を根拠としているので、全くの虚構ではないであろう。親が子に人間の生き方の模範を示すもっとも良い方法として、いわゆる偉人なるものの生き方を示すことは、ある意味では良い選択かも知れない。したがって、時代によっては、伝記が児童文学の中に入り込むことが多い。ただ、時代と共に偉人の概念が変化するので、普遍的ではないかも知れない。

しかしながら永遠に代わることのない人間としての理想像をテーマとしたものは、今後も伝記として生き続けるであろう。たとえば、ナイチンゲールやシュバイツァーなどの伝記は今後とも読み継がれるであろう。その意味で、伝記物語はやはり児童文学の中で、ある場所を占めていくに相違ない。

伝記物語の文学性については、いろいろな論議があると思うが、それは作者の書き方の問題に尽きる。作者が読者としての児童の感性にどう訴えるかが、この問題の鍵であろう。

したがって、伝記物語にも抒情性が深く文学的香りの高いものがあり、それが児童に与える積極的効果が期待できる。

#### c 改作物語

童話のジャンルに属すものの中には、かつては大人向けの読み物であったものが結構たくさんあ

る。大人の中で読まれているうちに、優しく読みほどくことによって子供にも理解できようなものになったのであろう。このようなものも、子供を対象とした作品とみなされれば、明らかに児童文学の一部となる。

19世紀末の耽美主義作家オスカー・ワイルドの『幸福な王子』は、本来、同時代の大人向けの寓話であったかも知れない。しかし現在では、もっぱら児童向け本として挿絵入りで出版されている。これなどは筋が明白で、易しく書き直せば、明らかに子供が読んで理解できる作品である。

同様にモンゴメリーの『赤毛のアン』やオルコットの『若草物語』も、児童向けの読み物として扱われることが多い。こうした名作は、精神的な発達の旺盛な子供時代に読ませることで、文学的感性を涵養するのに大いに役立つものである。

このような名作の改作ものは、児童に大きな感銘を与える効果があるので、児童文学の領域ではその存在価値が大きい。

## 4 好奇心型物語

児童は一般に、好奇心がたいへん旺盛である。不思議に思うことを盛んに聞いて追求するのも、子供の特性のひとつである。したがって、不思議な世界や未知の世界を冒険する話は大好きである。そういう理由から、探検・冒険・推理を伴う物語が、児童に好まれる傾向にある。

### a 冒険物語タイプ

子供用に書かれた冒険物語としては、マーク・トウェインの『トムソーヤの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』をあげることができる。マーク・トウェインは、当時の矛盾をはらんだアメリカ南部を背景に、子供の目を通して当時の社会情勢を描き出している。これは一種の社会小説とも考えられるが、主人公が子供であるから、児童向けとしても喜ばれる本である。

オックスフォード版の『児童文学事典』(*The Oxford Companion to Children's Literature*)には、冒険物語の項目にこう書かれている。

Adventure stories for children, especially boys, may be said to have had precursors in the medieval ROMANCES, many of which were read by children in debased CHAPBOOK form. The modern adventure story is descended directly from ROBINSON CRUSOE (1719), which was soon being imitated,...<sup>3)</sup>

ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』は、子供用の物語として読まれている。これをまねたと言われるジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』なども、少年の冒険心をかき立てる意味で、児童向けの物語として定評がある。ロバート・L・スチブンソンの『宝島』なども、ジム少年の冒険談であり、児童には興味を与える物語である。

とくに男の子が、このような冒険物語に興味をそそられるのは、その性格から当然のことであろう。したがって、いつの世でもこの種の物語は輝きを失わない。

### b 未来型物語タイプ

近ごろの宇宙ものなどは、当然、このカテゴリーに入る。すでに1世紀以上前に、ジュール・ヴェルヌは『海底二万里』などの未来ものを書いていた。19世紀末に H. G. ウェルズは、『タイムマシン』や『透明人間』などの作品を残しているが、これは大人を対象とした、いわゆる SF 小説である。



これらのものはそのままでは児童文学に入りにくいですが、近年、『ドラえもん』が子供に愛好されることを思えば、難しいことを可能にする未来の科学技術を媒体とする物語は、これからも子供たちに読み継がれることであろう。

#### c 探偵・推理物語タイプ

子供が興味を持つ読み物に、探偵ものや推理ものがある。コナン Doyle の一連のシャーロックホームズの物語は、いまや大人だけでなく子供たちにも好んで読まれている。また、女流推理小説家のアガサ・クリスティー連の推理小説も、いまでは子供向けのものが出回っている。日本でも江戸川乱歩の少年探偵団シリーズなどは、子供向けの推理小説としてよく読まれている。

また古来から、日本では頓知という概念で、推理や論理の物語を語っている。たとえば「一休さん」などは、こどもに考える面白さを与えるものであろう。

このように、本を読んで推理することは、子供の知的発達に役に立つものであろう。

#### まとめ

児童文学の範囲と種類は多岐にわたっているので、これを完全な形で整理するのはたいへん難しい。しかしながら、比較的緩やかな枠組みならば、幾つかの類型に納めることができるのではないかと試みたのが、本稿である。

一応四つのカテゴリーに納めることはできたが、これはまったく形式に関する分類であって、いわば横の分類である。縦の分類に相当する、精神作用に関する面の分類はできなかった。後者は、教訓、道徳、感性、教養、情操などといった人間としての精神的特質の教育面の問題であり、これらはいずれも、今回の形式的類型のどれにも関わるものである。

このような縦横の錯綜する構成の中で、児童文学そのものが成り立っているといえる。

#### 註

- 1) Peter Hunt, *An Introduction to Children's Literature* (Oxford: Oxford U. P., 1994), p. 15.
- 2) *Children's Literature—An Illustrated History*, ed. P. Hunt (Oxford: Oxford U. P., 1995), p. 290.
- 3) *The Oxford Companion to Children's Literature*, ed. H. Carpenter & M. Prichard (Oxford: Oxford U. P., 1999), p. 6.